

# 保育者養成におけるコミュニケーション能力を 育成するための造形教材の開発Ⅰ

—現職保育者の“木育”による実践活動を通して—

矢 野

(児童学科教授)

真

田 爪 宏 二

(京都教育大学准教授)

## 1. はじめに

本研究は、保育者養成における“木育”による造形活動が、コミュニケーション能力育成における実践的教材としてどのように有効であるかを考察するものである。

矢野・田爪・松井(2014)は、保育者を目指す学生たちが“木育”による実践を通して、造形に関する講義や演習、また教材研究などにおいて、どのように「学び」の深まりへとつながっているかということを検証するため、“木育”に参加した学生17名への質問紙調査を中心に、聞き取り調査および行動観察を行った。その結果、“木育”による実践が、自然や人とのふれあい・かかわり方、材料の捉え方、作品を通した感覚の大切さ、表現力の大切さなどを考えて取り組むことが明らかとなり、造形領域に関わる実践的教材として有効であることが導出された。

“木育”は、北海道庁の木育プロジェクト(平成16年9月)において提案されたものであるが、保育における“木育”は、木や森とふれあうことで、子どもの健やかな成長を促し、自然を大切に考え行動できる人を育てる教育のあり方を目的としている。松井(2013)は“木育”について、次の5つの柱を中心に掲げている。

- ①木と樹のつながりを感じる力を育てる
- ②モノを大切に作る心を育てる
- ③工夫する力を育てる
- ④根気ややる気を育てる
- ⑤協力する心、気遣う心を育てる

しかし、保育教材としての木は、加工や扱い、危険性などから、どのように幼児に展開するか

という具体的な方策が難しく、木に触れるなどの活動はあっても、つくる活動については、保育現場で敬遠される傾向があることがわかった。

そこで、保育現場で取り入れる実践的教材としての木について、次の点に着目した。

- (1) 保育教材としての木が、保育者に身近となり、幼児のつくる活動に積極的に取り入れていくことができるような導入となる教材を提案する。
- (2) 教材として、触覚や嗅覚などの感覚を重視することができるものを提案する。

ところで、保育教材としての木が保育者に身近なものとして感じられるためには、素材である木自体に保育者が親密さや安心感を得られることが必要であると考えられる。保育者が教材に興味や親密さを感じるとき、教材に対する感情が活性化される。また、本研究では上述したように触覚や嗅覚などの感覚に着目するが、上原ほか(2001)の自然・森林環境を利用した幼児教育の事例にもあるように、森林の肌触りや匂いにはリラクゼーション効果が認められている。そこで、本研究における実践で用いる木の教材に対する保育者の感覚を測定する一指標として、本研究では木の教材に対する感情の活性化やリラクゼーション効果を取り上げる。

## 2. 本研究の目的

以上を踏まえ、“木育”による造形活動がコミュニケーション能力育成における実践としてどのように有効であるかを考察するために、本研究ではまず、現職保育者を対象とした“木育”による実践を報告する。さらに、“木育”

による実践の効果に関して、木の教材に対する感情の活性化やリラクゼーション効果と、“木育”を活用した造形活動のコミュニケーションや創造性に対する効果に関するイメージ、および保育に対する自信（保育者効力感）を測定し、それらの間の関係を検討する。

### 3. “木育”による教材を用いた実践活動

#### 3-1. 対象

平成27年5月と12月開催の保育者研修としての“木育”によるワークショップに参加した保育者114名（女性107名、男性7名）。

#### 3-2. 造形実践の内容

“木育”について、講義および対話形式により、日本と木の文化を通じて理解を行った〈写真1〉。



〈写真1〉 さまざまな木材を手にしながらか育を理解する

5月のワークショップでは、京都で採れた杉の年輪部分（木口）を玄能で割りながら気に入ったかたちを選び、その木片の木口部分に紙やすりをかける（90分）、12月のワークショップでは、国産の朴、桧、杉、楠の4種の木片に紙やすりをかけながら（90分）、どちらも香りや手触りを感じ取ることを通じて「ペンダントづくり」を行った。

#### 3-3. “木育”による実践の様子

##### 実践1：杉を使ったペンダント制作

実施：2015年5月20日、18：00～19：30

参加者：15名（実践協力：京都市・S幼稚園）  
京都で採れた直径約10cmの杉材の年輪（木口）部分〈写真2〉を利用して制作を行った。



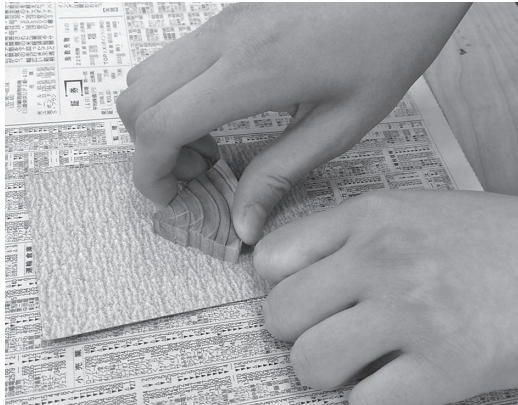
〈写真2〉 木口部分を使用した杉材

玄能で叩いて割ることができる木口部分の偶然にできたかたちの面白さ〈写真3〉を利用し、「ペンダントづくり」を楽しんだ。



〈写真3〉 杉の木口を玄能で叩き割る

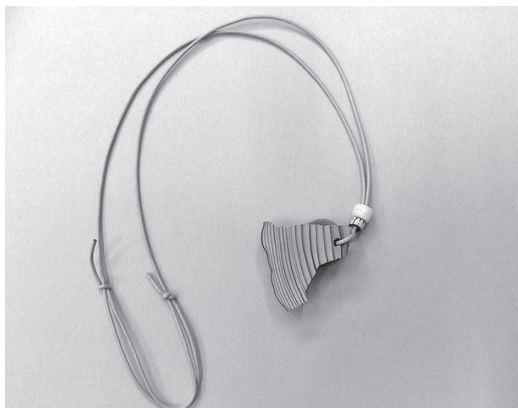
ここでは、杉の持つほのかな香りと年輪の模様や偶然に割ってできたかたちを何かのかたちに見立てるなど、木片と対話を行いながら制作を行った。



〈写真4〉 紙やすりをかける

参加した保育者は、初めのうちは木を使って制作することに不安を感じていたようであるが、玄能で叩くことによって割れることの不思議さと面白さに惹かれていく様子がみられた。

また、紙やすりをかける〈写真4〉と、ほとんどの保育者がほのかに香る杉に魅力を感じた様子で、紙やすりをかけながら香りを楽しむ様子が頻繁にみられた。



〈写真5〉 ペンダント完成品

ペンダント〈写真5〉完成後も、首にかけながら香りを楽しんでいる様子がみられた。

## 実践2：4種の木片を使ったペンダント制作

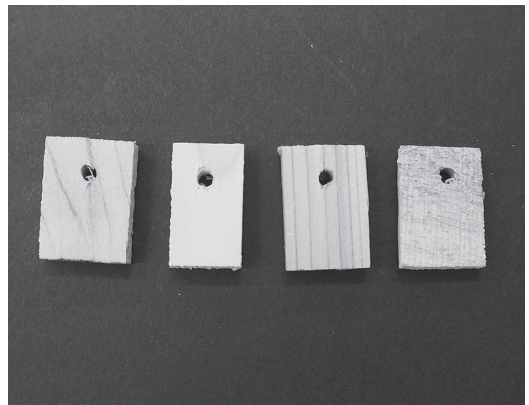
実施：2015年12月11日，18：00～20：00

参加者：99名（実践協力：M市民間保育園連盟・M市保育園長会）

日本産である朴，桧，杉，楠の4種材を使い制作を行った〈写真6〉。

国産の朴，桧，杉，楠の4種の木片を紙やすり（150，220，400，600番を，番数が目でわかりやすいよう，○・△・□・☆のマークをつけておく）〈写真7〉をかけ，それぞれの4種類の木の手触りや香りについて，違いを感じながら仕上げた。

“木育”についての講義では，日本の森林面積や寺社・仏閣，そして日本書記などにみられる木についての理解を深め，「日本は木の文化である」ということを理解した後，日本や世界には様々な木があることの理解を深めた。それらを踏まえ，4種類の木片を用いた実践を行った。実践では4種類の木片の手触りや色，香り



〈写真6〉 左から朴・桧・杉・楠の木片



〈写真7〉 紙やすりの番数がわかりやすいようにマークをつける



の違いを意識している様子がみられた〈写真8〉。

紙やすりをかける場面では、木屑が出ること



〈写真8〉 4種の木片に触れ、違いを実感する



〈写真9〉好きなかたちを紙やすりをかけてつくる



〈写真10〉かたが出来上がることに楽しんでいる様子

を気かけながらも、それぞれの木が持つ香りを確かめながら制作を行う姿がみられ、参加者の中には「(香りに)癒される」と言いながら作品づくりを積極的に行う様子がみられた。

〈写真9・10〉

また、手触りや香りについてお互いの作品を通じてコミュニケーションを取る様子もみられた。

#### 4. 質問紙による“木育”による教材のリラクゼーション効果および“木育”を活用した造形活動のイメージの検討

ここでは、本研究で使用した“木育”による教材に対してどのようなリラクゼーションを感じたか、また実践の感想としての“木育”を活用した造形活動のイメージとリラクゼーション効果との関係を検討する。

##### 4-1. 調査方法

ワークショップの終了後、参加者に対して質問紙調査を実施した。以下の設問および、基本属性として性別、年齢、保育経験年数を質問した。

設問1.“木育”による教材のリラクゼーション効果 “木育”による教材に関わった感想に関して、リラクゼーション効果を測定する尺度であるアラウザルチェックリスト(畑山他, 1994)を実施した。この尺度は、活動性や活発さを示す全般的活性(GA)、退屈さを示す脱活性-睡眠(DS)、不安や緊張を示す高活性(HA)、リラクゼーション効果を示す全般的脱活性(GD)の4因子からなる。各因子に含まれる項目を〈表1〉に示す。各項目について、「非常に感じた(4)、ある程度感じた(3)、少し感じた(2)、まったく感じなかった(1)」の4件法で回答を求め、得点化した。各因子に含まれる項目の平均値をその因子の尺度得点とした。

設問2.“木育”を活用した造形活動のイメージ “木育”を活用した造形活動に関して、図1に示す項目を用いて質問し、それぞれについて「はい(5)、どちらかといえば はい(4)、どちらともいえない/わからない(3)、どちらかと

〈表1〉 設問1. アラウザルチェックリストの項目

全般的活性(GA)	: 活動的な／活気のある／活発な／積極的な／精力的な
脱活性―睡眠(DS)	: だるい／眠い／ぼんやりした／うとうとした／だらだらした
高活性(HA)	: いらいらした／どきどきした／緊張した／そわそわした／びくびくした
全般性脱活性(GD)	: のんびりした／ゆったりした／のどかな／落ち着いた／くつろいだ

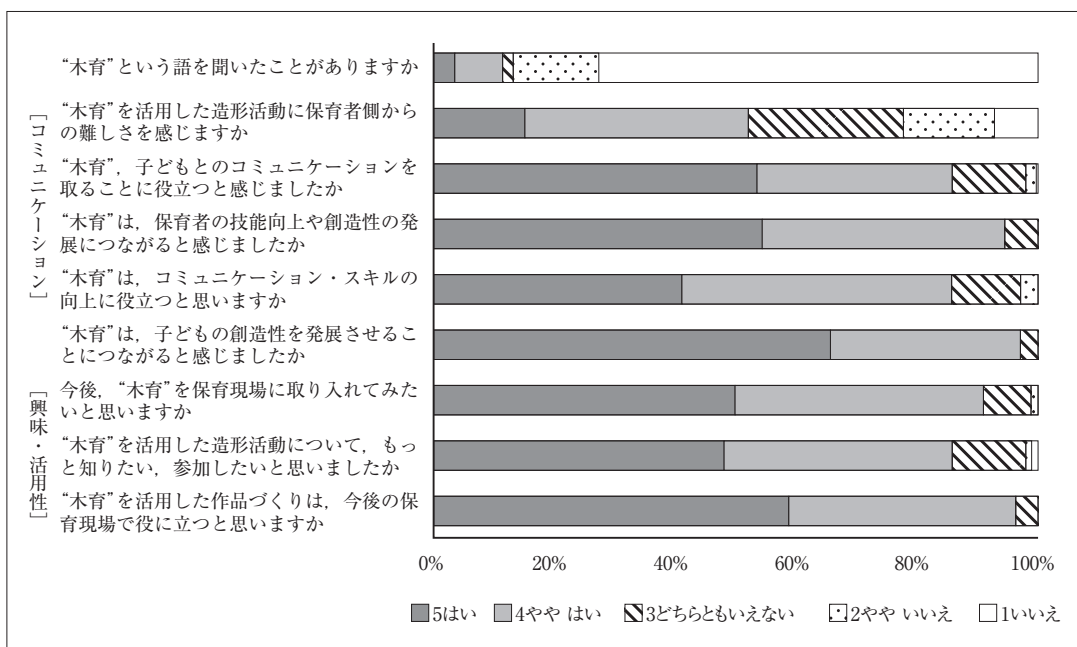
〈表2〉 設問2. “木育”を活用した造形活動のイメージの因子分析結果

質問項目	因子1	因子2
因子1: [コミュニケーション] コミュニケーション・スキルを促す教材としての木育の効果		
エ. “木育”は, 子どもとのコミュニケーションを取ることに役立つと感じましたか	.987	-.183
カ. “木育”は, コミュニケーション・スキルの向上に役立つと思いますか	.709	.031
オ. “木育”は, 保育者の技能向上や創造性の発展につながると感じましたか	.705	.074
ウ. “木育”は, 子どもの創造性を発展させることにつながると感じましたか	.658	.019
因子2: [興味・活用性] 木育を保育に取り入れることに対する興味や活用に対する意識		
ク. 今後, “木育”を保育現場に取り入れてみたいと思いますか	-.043	1.000
キ. “木育”を活用した造形活動について, もっと知りたい, 参加したいと思いましたか	.246	.604
イ. “木育”を活用した作品づくりは, 今後の保育現場で役に立つと思いますか	.236	.470
ア. “木育”という語を聞いたことがありますか	-.095	.242
ケ. “木育”を活用した造形活動に保育者側からの難しさを感じますか	-.161	-.004

累積寄与率=.492, 因子間相関係数=.656

〈表3〉 アラウザルチェックリストの尺度得点の平均値と標準偏差

	全般的活性(GA)	脱活性―睡眠(DS)	高活性(HA)	全般性脱活性(GD)
M	2.73	1.39	1.26	3.07
SD	(0.59)	(0.50)	(0.28)	(0.68)



〈図1〉 木育活動のイメージの質問項目および回答の分布

例えば「いいえ(2), いいえ(1)」の5件法で回答を求め、得点化した。因子分析(主因子法, プロマクス回転解法による, 以下同じ)を行い, 固有値1以上で因子を抽出した結果, 2因子が抽出された(表2)。因子負荷量.4以上の項目をその因子項目として, 各因子に含まれる因子項目の特徴から, 因子1をコミュニケーション・スキルを促す教材としての“木育”の効果(以下[コミュニケーション],  $\alpha=.834$ ), 因子2を木育を保育に取り入れることに対する興味や活用に対する意識(以下[興味・活用性],  $\alpha=.830$ )とした。因子項目の得点の平均値をその因子の尺度得点とした。

**設問3. 保育者効力感** 保育者としての自己の力量, すなわち自分自身が保育者としてどの程度の活動ができるのかについての認識について測定する指標として, 保育者効力感尺度(三木・桜井, 1998)を使用した。三木・桜井によれば, 保育者効力感とは保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらす事が出来るであろう保育的行為をとることができる信念であるとされる。「私は, 子どもにわかりやすく指導することができると思う」「私は, 子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う」等の10項目について, 「とてもそう思う(5)―全くそう思わない(1)」の5件法で回答を求め, 得点化した。因子分析の結果, 先行研究と同様に1因子に収束し( $\alpha=.929$ ), 10項目の平均値を保育者効力感の尺度得点とした。

## 4-2. 結 果

### 4-2-1. “木育”による教材のリラクゼーション効果

アラウザルチェックリストの4因子の尺度得点の平均値を(表3)に示す。1要因分散分析により尺度得点の平均値を比較した結果, 主効果が有意であり( $F(3,333)=330.73, p<.001$ ), 有意水準5%のTukey法による多重比較(以下の分析においても同様の手法を用いた)の結果, 全般性脱活性(GD)の得点が最も高く, 次いで全般的活性(GA)が高く, 脱活性―睡眠(DS)および高活性(HA)の得点はそれらよりも低かった。つまり, 本ワークショップで使用した“木育”による教材は, GDにみられるリラクゼーション効果が大きく, DSにみられる退屈さやHAにみられる不安, 緊張は低かったと言える。

なお, アラウザルチェックリストの因子ごとに保育経験による差異を1要因分散分析により比較したが, いずれの因子においても主効果はみられなかった。

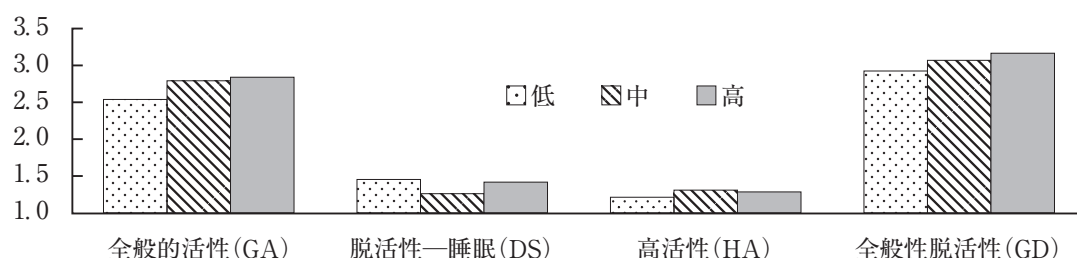
### 4-2-2. “木育”を活用した造形活動のイメージ

質問紙における回答の分布を(図1)に示す。設問「“木育”という語を聞いたことがありますか」における回答から, 参加した保育者のほとんどが“木育”についての事前知識を有していなかったが, 他の項目における回答からワークショップ後には多くが興味を持ち, 保育に役

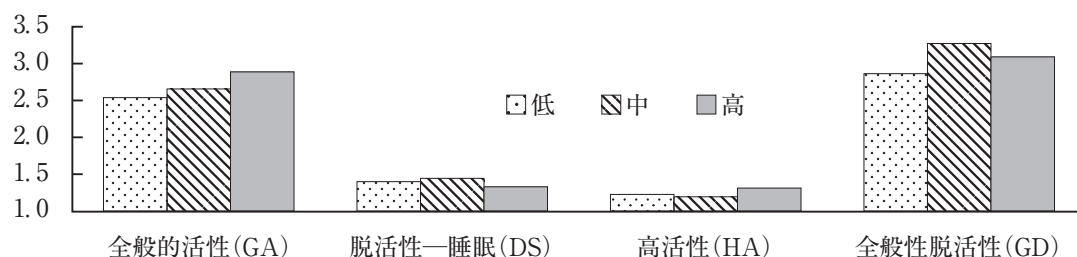
〈表4〉 保育経験年数による木育活動のイメージの平均値および標準偏差

質問項目		保育経験年数 (N)					$F^{\text{註}}$
		5年未満 (39)	5～10年 (24)	10～20年 (28)	21年～ (13)	全体 (104)	
因子1:[コミュニケーション]	<i>M</i>	1.82	2.17	2.32	2.38	2.11	2.50+
	<i>SD</i>	(0.82)	(0.87)	(0.90)	(0.87)	(0.88)	
因子2:[興味・活用性]	<i>M</i>	1.95	2.00	2.04	2.08	2.00	0.08
	<i>SD</i>	(0.92)	(0.88)	(0.88)	(0.95)	(0.89)	
“木育”という語を聞いたことがありますか	<i>M</i>	1.49	1.50	1.71	1.46	1.55	0.29
	<i>SD</i>	(1.02)	(1.25)	(1.18)	(0.88)	(1.10)	
“木育”を活用した造形活動に保育者側からの難しさを感じますか	<i>M</i>	3.97	3.08	3.14	2.85	3.40	6.59***
	<i>SD</i>	(0.82)	(1.10)	(1.11)	(1.21)	(1.11)	

註:  $F$  値は1要因分散分析による保育経験年数間の比較 \*\*\* $p<.001$  +  $p<.10$



〈図2〉“木育”を活用した造形活動 因子1 [コミュニケーション] の高低による，リラクゼーション効果の差異



〈図3〉“木育”を活用した造形活動 因子2 [興味・活用性] の高低による，リラクゼーション効果の差異



〈図4〉 保育者効力感の高低による，リラクゼーション効果の差異

立つと考えていた。

“木育”を活用した造形活動のイメージの因子1，2および因子に含まれなかった2項目（“木育”という語を聞いたことがありますか，“木育”を活用した造形活動に保育者側からの難しさを感じますか）について，保育経験年数による得点の平均値を〈表4〉に示す。設問「“木育”を活用した造形活動に保育者側からの難しさを感じますか」については保育経験年数による差がみられ ( $F(3,333) = 330.73, p < .001$ )，経験年数5年以下の者はそれ以外の者よりも難しさを感じていた。

#### 4-2-3. “木育”による教材のリラクゼーション効果と“木育”を活用した造形活動のイメージおよび保育者効力感の関連

“木育”を活用した造形活動のイメージとの関連 “木育”を活用した造形活動のイメージの因子1と2尺度得点について，それぞれ  $M \pm 0.5SD$  を基準に対象者を高／中／低群に分類した。これを独立変数として，アラウザルチェックリストの各因子の尺度得点について，因子ごとにその高低による差異を1要因分散分析により比較した。その結果，因子1 [コミュニケーション] では，全般的活性 (GA) ( $F(2,112) = 3.42, p < .05$ ) において主効果が有意であり，多重比較の結果，低群は他の群よりも得点が低



かった〈図3〉。この結果から、コミュニケーション・スキルを促す木育による教材の効果の認識が低い者ほど、教材もしくは木育活動そのものに対して活発さを感じていないと言える。

因子2〔興味・活用性〕では、全般的活性(GA) ( $F(2,112)=3.81, p<.05$ ) および全般的脱活性(GD) ( $F(2,112)=3.12, p<.05$ ) において主効果が有意であり、多重比較の結果、GAでは低群は高群よりも得点が低く、GDでは低群は中群よりも得点が低かった〈図3〉。この結果から、“木育”を保育に取り入れることに対する興味や活用に対する意識が低い者ほど、教材もしくは木育活動そのものに対して活発さやリラクゼーションの効果を感じていないと言える。

**保育者効力感との関連** 次に、保育者効力感の尺度得点について、 $M\pm 0.5SD$ を基準に対象者を高／中／低群に分類した。これを独立変数として、アラウザルチェックリストの因子ごとに、保育者効力感の高低による差異を1要因分散分析により比較した。その結果、全般的脱活性(GD)において主効果が有意であり( $F(2,109)=3.95, p<.05$ )、多重比較の結果、高群は低群よりも得点が高かった〈図4〉。つまり、保育者効力感が高い者ほど、教材に対してリラクゼーション効果を感じていると言える。

#### 4-3. 質問紙調査のまとめ

以上の結果を総合すると、当初はあまり認識されていなかった“木育”を活用した造形活動は、本研究で実施した実践後においては、参加者である保育者の多くが興味を持ち、保育に役立つと考えるようになり、コミュニケーション能力を高める教材として、保育における効果が実感できるものとなったと考えられる。

また、保育者は“木育”による教材に対して一定のリラクゼーション効果感じていたことから、“木育”のもつリラクゼーションの特性が保育者や子どものコミュニケーション・スキルの向上につながる可能性が考えられる。

ただし、保育経験の少ない者にとっては難しく感じられる活動であったことや、リラクゼー

ションの効果は教材の効果の認識や保育者効力感の高さに影響を受けていたことから、木育による教材を有効に活用し、その効果を実感するためにはある程度の保育経験や教材に対する認識、保育に対する自信、効力感が必要であると考えられる。

#### 5. 総合考察

本研究では、“木育”による造形活動を通して、木が保育者に身近となり、幼児のつくる活動に積極的に取り入れることができること、そして触覚や嗅覚などの感覚を重視することができる教材を提案した。そこで、切る・組むといった木の実践における難しさを感じる工程を省いた、やすりをかけてかたちをつくる「ペンダントづくり」を行った。最初は木を使って制作することに不安を感じていたようであるが、次第に香りや手触りに魅力を感じ、リラックスしながら楽しむ様子がみられた。実践後は、参加者である保育者の多くが木についての興味を持ち、保育で実践しようとする声も聞かれたこと、また、“木育”のもつリラクゼーションの特性が保育者や子どものコミュニケーション・スキルの向上につながる可能性が考えられ、コミュニケーション能力を高める教材として、保育における効果が実感できるものとなった。

以上の結果を受け、今後は学生を対象とした“木育”による教材のリラクゼーション効果と、“木育”を活用した造形活動の、コミュニケーションや創造性に対する効果に関するイメージを測定し、学生と現職保育者との比較・検討を行う。



## 引用・参考文献

- 矢野真・田爪宏二・松井勅尚（2014）．保育者養成における実践的教材としての「木育」—学生の「学び」の深まりを中心に，京都女子大学発達教育学部，*10*，113–119.
- 松井勅尚（2013）．幼児の心とからだを育むはじめての木育，黎明書房，6–10.
- 上原巖・Moni HEPP-HOPPENTHALER（2001）ドイツにおけるヴァルト・キンダーガルテンについて—自然・森林環境を利用した幼児教育の事例—，中部森林研究，*49*，112–113.
- 畑山俊輝・Antonides, G.・松岡和生・丸山欣哉（1994）．アラウザルチェックリスト（GACL）から見た顔のマッサージの心理的緊張低減効果 応用心理学研究，*19*，11–19.

三木知子・桜井茂男（1998）．保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究，*46*，203–211.

## 付記

本研究は，平成28年度科学研究費 基盤（C）研究課題（課題番号：15K04324）「保育者養成におけるコミュニケーション能力を育成するための造形教材の開発」（研究代表者：矢野真，分担者：田爪宏二）の補助を受けて行われたものである。